



## きこえと思いやり

加納 桃子

私は生まれつきの感音性難聴です。

生まれは1992年2月25日になります。

補聴器をきちんと両耳装着し始めたのは2歳ころになります。

私は、初めて補聴器をつけたときに聞いた家の時計の音を今でも覚えています。

あの音の感動は今でも忘れることが出来ません。

また、両親いわく、私は初めて補聴器を付けたその日決して外すことはなかったそうです。

小さいころから歌を聴いたり歌ったり、本を読むこと、人と話すことが好きだった私は音のない世界で過ごしていた日々の言語のブランクをあっという間に挽回し、すぐに周りの世界になじむことが出来ました。

最初は、聴こえとことばの教室と保育園、小学校からは校外通級で聴こえとことばの教室。

中学校は校内通級で国語、英語のみマンツーマンで指導していただいております、高校からは難聴学級等には通わず普通高校のみで過ごしました。そして、大学は国立大学法人筑波技術大学へと進学し、ここは聴覚障害もしくは視覚障害者のみが入学することが出来ます。

ここで、初めて手話を学び、社会人2年目になった今も手話のありがたさを感じる毎日です。



私は、聴こえに関して自分で聴こえないと諦めることがとても嫌で妥協をすることはありませんでした。

そのおかげで得たものもとても多く、今になって感謝することは日々あるのですがそれと同時にとてもいろいろなことを溜め込み自分の本当の聴力を偽ってきたようにも思います。

実は、聴こえていなくても聴こえるフリをすること24年間。最近になって聴力の変動もあり、やっと自身の聴力としっかり向き合う時がきたのだと思っています。



まとめになりますが、みなさんに伝えたいと思うことはたくさんありますが特に「聴覚障害は不幸ではないということ」「聴力ではなくその人を見てほしい」ということです。

「聴覚障害は不幸ではない」ということについては、私は生まれつき聴覚障害があったことで確かに不便なこともあり、誤解を受けたこともあります。しかし、そんなことはみんな誰だってあることでむしろ私は聴覚障害があったからこそ保育園時代も両親といる時間が他の子供よりも多く、小学校時代の校外通級では普通小学校の授業を早退して父や母と校外通級の小学校まで通うのが楽しみでした。大学では手話も学ぶことが出来て、たくさんの友人を作ることが出来ました。

聴覚障害があるからこそ得た幸せがたくさんあります。

聴覚障害児をお持ちのご両親は、子供との時間がたくさん出来ますし、たくさんの思い出がいつか大切な宝物になります。

そして、最後に「聴力ではなくその人を見てほしい」というのは、聴覚障害があってもみんなと同じ個性を持った一人ひとりの人間です。

「聴覚障害が重いからこの道へ進ませよう」ではなく、その子を見てその子の未来を決めてほしいと心から願います。たとえ、聴覚障害が重くともその子の持つ力はそんなハンデを簡単に吹き飛ばしてしまうくらい強いものかもしれないのです。